宝物

ボーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝物

【Ｎコード】
Ｎ１１１３Ｍ

【作者名】
ボーン

【あらすじ】
残されたおもちゃ達の前に、兎と亀が現れる。

茶色い錆が右太股の付け根を覆っている。腕をもがれそうな程激しく振り回された末に衝突した机の角が、左腕を抉った後がある。赤い服を来たおもちゃの兵隊は、動くことができなくなってからずっと、ビー玉につきそわれていた。ビー玉は自ら動くことはできなくとも、地が傾けば自由に飛び回れた。だが、おもちゃ箱と書かれた段ボールに詰められガムテープを貼られ、早幾年。静止状態で、存在することしかやることのない閉塞状態が、限りなく続いていくように思えた。

「なあ」

とビー玉が声をかける。兵隊は視線だけで先を促した。

「何か音がしなかったか」

「コンピューターの作動音じゃないです」

タイムカプセルという言葉がレトロモダンでいいじゃないか、と流行りだし、最新の高速演算機で処理され始めたのはいつだったろうか。自らは火星に移住し地球を丸ごと大きなタイムカプセルにしてしまった人類は、未だ地球に帰る様子を見せない。その有り難くない恩恵にあずかってしまった兵隊とビー玉その他「思い出たち」にとって、作動音は聞きなれたものだった。

だがビー玉は「ちげぇよ」と言ったきり、何かを考えこむように黙ってしまった。

兵隊はそんな様子を見るともなしに見て、それだけだった。

「なあ」

「なんですか」

先より幾分弾んだ声に、兵隊はまた声を返す。

「あそこに見えるの、兎と亀じゃね」

ビー玉が声を向けた先には、艶やかな毛並みの茶色い兎、眼の赤い

白亀がフワフワと浮いていた。
兵隊は右手で目を擦る。ニ体が消える様子はない。
「兎と亀ですね」
「なんだ、寝ぼけた答えだな」
「ですか、それしか答えようがないじゃないですか」
「もっと建設的なこと、考えられないのかよ。頭の中までで錆び付いてんのか」
兵隊の頭は金属で充填されている。空間がないのだから錆びるはずはないと思ったが、長い時間でビー玉に逆らってもやり込められるだけと学習していた為、別のことを口にした。
「声、かけてみません」
「俺もそう思ったけどなあ。あいつら透けてるし、実態のないデータってやつなんじゃねえか」
「まあまあ、とりあえず、やってみましょう。あのう、そちらのお二方」
兵隊の問いかけに、思いがけず二対の目が動いた。視線があった。
「あれ、あいつらなんかやり始めたな」
「なんでしょうね、ジェスチャーですか」
兎はしきりに空へ向かって跳ね、亀は凄い勢いで手足を甲羅から出し入れしだした。
「うわ、白い亀って皺の黒とのコントラストがはっきりする分、気味悪いですね」
「お前、相手が実体じゃないかもしれないったって目と鼻の先にいるんだからよ。遠慮しろよ」
「いやだって、なんだか段々薄くなってるじゃないですか」
兎と亀は、まだ動き続けていた。必死になにかを伝えたいように見えたが、ビー玉にも兵隊にもその意図は汲なかった。最後には彼らは宙に浮いて互いをおいかけるように走り出した。スピードがぐんぐん上がり、軌跡が円を描き出したところで、すっかり消えてしまったようだった。

「なんだったんでしょうか」
「さあな」
兵隊は、悪い予感を覚えた。しかし実際のところ、永遠にタイムカプセルという名の「おもちゃ箱」という牢獄にに閉じ込められたままの現実よりも忌避すべきものなど、ないようにも感じた。
「まあ、大事な用ならまた来るだろ」
「というより、彼らは存在してるんでしょうか」
「俺らおもちゃが幻覚を見る能力を持つようになったってんなら現実にはいないかもな」
「見たままにしか見れないのが私たちですからね」
ビー玉は返事をしなかった。兵隊も、返事を求めていたわけではない。そして、長い間変わらぬ沈黙がまた二人を覆い始めた。
「あっ」
ビー玉の声だ、と思うと同時かそれより早く、白い光に視界を奪われた。

「とうとう落ちたな」
「あの地球という星も災難だ。火星と月に直撃されるとは」
「引力で自然落下した月についてはしょうがないが、火星は明らかに生物のつくりだした推進力で落ちたな」
「助けはださなかったのか」
「確か連合が出すって言ってたな」
「助かるといいな」
「そうだな」
布製のバレリーナと市松人形は顔を見合わせて頷きあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1113m/

宝物

2010年10月11日02時56分発行